

ビルマ精霊信仰考 I — Ko Myo Shin

高谷紀夫*

Ko Myo Shin in Burma

Michio TAKATANI*

Abstract

Ko Myo Shin (Lord of Nine *Myos*) is a spirit (*nat*) worshipped in Burma and recognized as a Shan nat. In the popular group of spirits there are 37 nats, in which Ko Myo Shin is not included. But we can see its images in *nat* shrines and hear its name in spiritual rituals. It is known that nats have various origins. In many cases Ko Myo Shin appears not alone but together with other popular nats. This co-existence is seen in the cases of other spirits, too and seems to be an important feature of spirit-worship in Burma. This paper is attempt to study this feature through analyzing Ko Myo Shin legends.

Factors of the legends analyzed are as follows :

1. Ko Myo Shin is an *asein* nat, which means that death must be unnatural.
2. Ko Myo Shin is a land-superintendent from a spiritual world, where the number nine is avoided as a taboo.
3. Ko Myo Shin is identified in legends with the taboo against the number nine which is probably derived from Shans.
4. All the protagonists in the legends die in the end and become nats. On the other hand, in plots of popular nats legends, Burmese Kings appoint *asein* nats as guardian-spirits and worship them.
5. The relationship between Ko Myo Shin and the Burmese King is obscure, which seems to mean that the story is an entertaining one rather than spirit origin telling and the time of the formation of the legend is newer than others.

There are two important motifs in Ko Myo Shin legends. One is the unlucky brother and sister pair, the other is the pair of two unlucky sons. The former is found in Min Maha Giri Nat (house guardian-spirit) legend whose worship is seen throughout Burma. The latter is common to Taungbyon Brothers Nats who have the most popular festival in Burma.

These two motifs in local legends seem to have prevailed extensively before the formation of the legends. So in the stages of forming Ko Myo Shin legends,

* 鹿児島大学教養部文化人類学研究室

Dept. of Cultural Anthropology, College of Liberal Arts, Kagoshima University, 21-30, Korimoto 1-Chome, Kagoshima, 890, Japan.

we can conclude that it was firstly influenced by the Min Maha Giri type legend, secondarily by two-sons-type motif, and involved nine symbolism. And the formation process seems to be connected with Ko Myo Shin's co-existence with other spirits and historically with the conflicts between Burmese and ethnic minority group like Shans.

Key Words : Spirit-worship, Burmese culture, Shan, Folklore.

1. イントロダクション

Ko Myo Shin (以下 KMS) は、ビルマでポピュラーな精霊 (nat) のひとつである。ビルマを訪れる人は、Nat 儀礼の場における精霊の招請においてしばしば、また Nat 祠の偶像群の中にその具体化したイメージをたどることができる。KMS 信仰の中心エリアは上ビルマとされているが、観察する機会を得た下ビルマ、ラングーン周辺においてその像は他の精霊の像と併存していた。Nat 儀礼においても単独ではなく一群の、時には起源的に関係が認められない精霊群の中に位置していた。そのことは、いままで Nat 信仰についての考察においてその言及があっても、KMS 信仰としてまとまった考察がなされなかったこととも無関係ではないだろう。ビルマの精霊信仰におけるこの並存性、集団性はその特異性のひとつである。その特異性は何に由来するものであろうか。出自的に類縁性のない複数の精霊がなぜ併存するのだろうか。その理由は、たとえばその一例である KMS 精霊信仰の内部構造にあるのだろうか。それともビルマ精霊信仰の特異性全体の一部として他の精霊についても認められるのだろうか。本論は以上の認識に立ち、KMS 信仰について主としてその起源伝説をたどりながら、その構造的な理解を試みることを目的とする。ただし、精霊伝説の要素分析がその究極的目標ではなく、その信仰を包含するビルマの精霊信仰全体への分析の発展を意図している。

2. KMS のアイデンティフィケーション

(1) KMS の出自とその民族性

上ビルマにおける KMS Nat の認知と浸透は、M. E. SPIRO による一村落における父方母方から継承される Nat (*mizain-pazain* Nat) の調査結果に端的に表われている。それによれば、KMS は Komyoumin として、ビルマ最大の精霊祭礼の主人公である Taungbyon に次いでランクインされている¹⁾。

ビルマの精霊群のセットとしては、37柱の Nat (*thon:zekuna min* :) がよく知られている。その中には Taungbyon 兄弟も含まれている。だが、KMS は過去、王朝時代に幾度かまとめられた集成リストのいずれにも含まれていない。それにもかかわらず、ラングーン周辺の Nat 祠のいくつかに37柱の Nat と並んでそのイメージに出会う。ラングーンから北へペゲー方向に18マイルのバス停付近にドライバーの交通安全の守護神として信仰を集めている祠がある。その本尊は、*Shwe Nyaungbin* Nat (the Golden Banyan Tree Nat) だが、その偶

像の配置においては、右端に *Shwe Nyaunghin Bo Bo Gyi* が位置し、*Popa Medaw* など *Taungbyon* 兄弟と由縁の精霊像などが並び、その左端の影に KMS の像を見ることができ。交通安全の守護神としての信仰は、いうまでもなく自動車がビルマに入ってきて以後のことであるし、偶像自体由緒あるものとも思えなかった。またその像の安置の経緯についてもはっきりしない。だが、なぜ本尊以外の像がともに並べられているのだろうか。また、ラングーン郊外の北東部に、*Kyaikasan Pagoda* が位置しているが、そこにも37柱の Nat に含まれる精霊と並んで KMS の像が奉納されている。地方における Nat 祠に像が必ずしもないことから考えて、精霊偶像崇拝はそれほど古いものではないのかもしれない。だが、その並存性は確かに認められるのである。

並存の特異性をさらに特徴づけるのがその出自である。

KMS の出自は Shan 族とされている。Shan 族は1973年のセンサス資料によれば、そのビルマ総人口に占める割合が、8.9%で単純計算では約250万人弱となり、1983年センサスまでの人口増加率を乗算すれば1983年現在推定300万人余りということになる。ビルマ多民族社会においては、1973年時点で68%を占めるビルマ族に対し、少数民族サイド最多の人口をほこる²⁾。ビルマの少数民族の間には *lunyogyi* (大きな民族) *lunyonge* (小さな民族) の識別があり、Shan 族は、Karen 族とともに前者に属す。ところが、KMS の少数民族起源についての認知があるにもかかわらず、その信仰は Shan 族と排他的に結びついているわけではない。その関心の程度はともかく、その民族性を越えた信仰の広がりをたどることができる。「9」についてのタブーがそれである。「KMS が支配する土地では9人で行くな」という内容で、多数で出かける際の、人数を気にする慣習の由来に関係している。出自の民族性を越える信仰の裾野の広がりは KMS だけではない。下ビルマでは、U Shin Gyi と呼ばれる Mon 族起源の精霊が信仰を集めている。この精霊は下ビルマのデルタ地帯から沿岸一帯において人気があり、汽水を行き交う船の安全をあずかる守護神として信仰されている³⁾。またラングーンでは、水牛のかぶり物をし、魚を抱いた *Nankayain Medaw* の像を家屋の周囲の敷地の住みに立てられた祠の中に見ることがある。この精霊の出自も Mon 族である。だが、その祠を祀る家の主は Mon 族とは類縁関係があるとは限らない。また、後述するように *Taungbyon* 兄弟の出自はインド系である。出自の民族的多様性は、37柱の Nat (*apin* 系) の出自にも明らかである。それによれば、ビルマ族にその起源をたどるのが28柱、Mon 族系が2柱、Shan 族由来が1柱、インド系3柱、Yuan 族系1柱、バラモン2柱と分類される⁴⁾。

起源伝説のある精霊は、具体的な地域と関係している。その地域に住む人々や、その地域を通過する人々にとって荒ぶる神として、また守護神として祀られた。そしてそれぞれの精霊はまた人々とともに動いた。その信仰は、排他的なものではなく、行く先々で他の人々を取り込んでいったように思われる。上ビルマを起源とする精霊が、その多くが支配者としての王の対抗側に属して、大半が不運な死を遂げているというモチーフに表われるように、王家に関係があるのに対し、下ビルマで信仰される Mon 族起源の精霊が王家と直接関係がないという違いがあるものの、上ビルマから南へ、下ビルマから北へという人々に伴っての信仰の広汎化と移動という点では共通している。民族性を越える並存性の背景のひとつをここにた

どることができよう。信仰の広汎性、そして多系の精霊を同居させて祀る慣習の背景について考察をこれから進めなければならない。その視点から KMS の精霊起源伝説を以下たどることにする。

(2) KMS 精霊起源伝説

テキストは、Sir R. C. TEMPLE の *The Thirty-Seven Nats*, 1906 の U HTWE HAN 翻訳、U BA NYUNT 編集によるビルマ語版 *Myanma Miyou : phaladalei Nat Thamain*, (以下 NT) 1981 からのものであるが、KMS 精霊伝説は TEMPLE の原本にはない。従って以下の伝説はビルマ語版のオリジナルである。だが、その採集の由来、参照については何の言及もない。そのためテキストの背景が不明であることを付記しておく。

『いつの頃か分からない。Padaung 国の王 Hla Sei Thu と王妃 Ku Ni De Wi の間に皇太子 Ko Myo Shin と王女 Pa Le Yin がいた。

王は特別に目をかけていた王子の世話役 Ba La Kyaw が死んだ後、その代理として、その息子の馬乗りにも秀でた Bouhmu Min Kyaw Zwa を王子 4 人の 1 人として、また貴族として任じた。

Min Kyaw Zwa は王子となって以来、U Nyo Hsoe を館の執事に任じて、飲み食い遊びに女達と来る日も来る日も興じていた。

王に忠誠を誓った忠臣 Maing pyin 諸侯 Saw Khwun Kyi を Kyaing Taung 諸侯 Saw Thi Ha が攻撃して、Saw Khwun Kyi の側から助けが求められ、Ko Myo Shin と Min Kyaw Zwa が采配して Shan の国へ進撃したが、彼等が到着する前に Saw Thi Ha の仕業で Saw Khwun Kyi が死んでしまったので、Maing pyin の領土と人々の支配権を譲り渡してしまい、幼い息子 Khwun Khyoe, Khwun Tha の 2 人を自国の方へ呼んだ。

到着して事の始終を聞いた王がその二人を Ko Myo Shin と Min Kyaw Zwa にそれぞれ 1 人ずつ育てるようにさせたが、Min Kyaw Zwa に預けた子供が性向と品性が悪くなることを鑑みて彼には渡さず、Ko Myo Shin と Pa Le Yin 王女に王子と一緒に育てるようにさせ、Min Kyaw Zwa に対してはほうびとして Pahkan Myo を封土した。それから「Pahkan Min Kyaw」とも「Pahkan U Min Kyaw」とも呼ばれるようになった。Khwun Khyoe と Khwun Tha のために、U Min Kyaw が恥づかしさのあまり王に対して恨みを抱くようになり、王座を奪い Pa Le Yin を王妃にしようと計画した。

Khwun Khyoe, Khwun Tha が成人に達したので U Min Kyaw は、計画を実行に移そうと考えて、腹心の部下と結託して Shan の国で反乱が起きたこと、制圧に Khwun 兄弟が赴いた方が良く、制圧後、Shan の国を 3 年治めるために留まらなければならないことを信じさせるべく申し立て、王がそれを信じ 2 人を Shan の国へ行かせることにした。

2 人の兄弟が Shan に着いても反乱の暴徒に会わず快樂の宴に興じて平穩に過ごしたけれども、命令に従って 3 年その地に留まった。

Khwun Khyoe, Khwun Tha がいなくなった後、ある夜 U Min Kyaw の部下が王宮に押し入り王と王妃を暗殺して王宮を我が物として王座に就いた。

Ko Myo Shin は Pa Le Yin を担いで逃げのび、父王が古くから知る Kyauk Htap 村の素封家 U Tha Myat の屋敷にたどり着き、分からないように貧しい姿に身をやつして留まった。

ある日 Ko Myo Shin は Pa Le Yin を素封家の処に預けて国内の情勢を調べながら、そして Khwun Khyoe, Khwun Tha を捜しながら姿を隠すように Shan 族の服装をまとめて出掛けて行った。

Pa Lei Yin と素封家の息子 Maung Lat が互いに慈しむようになり、一人の女の子が生まれ、両親と祖父に心よりかわいがられ「The The Kalei」と名づけられた。

Khwun Khyoe, Khwun Tha が国に帰って来ると U Min Kyaw は王位に就いたのは 2 人のためであること、自分は年とって老人になって精進を守り、法に従い生活をするを信じさせるように話し、王座を降りたら自分は命じられたことをしようと誓った。

2 人に王座を譲った後、Ko Myo Shin を捜し首を取って献上するよう命じられ、誓いの水を飲んだ 2 人が Ko Myo Shin を捜したところある田舎で出会った。

2 人は育ててくれた父ともいべき人の首を切れず、Ko Myo Shin は誓いを守って自分の首を自ら切って与えた。

Gwei Khyoe 山の Zagawa の木 Yeittha 陣地で San Te Nan と待っている U Min Kyaw の処へ Ko Myo Shin の首を持って行き献上すると、くだんの計画に従って 2 人を捕えて殺してしまった。Khwun 兄弟は *asein nat* (怨霊) になって Zagawa の木を倒して U Min Kyaw と部下は押えつけられて死に、Nat になった。

Nat になった Ko Myo Shin は妹の処へやってきて見たところ、兄も一生、妹も一生家庭を持たず、独身で過ごそうと誓った彼女が、家主と娘と居るところを見て、人間の世界には置いておけないと魂 (*leikpya*) を抜いて Nat の世界へつれて行った。

彼女は娘と別れるに忍びず、猫に姿を借りて娘の揺り籠の中に飛びおりた。娘はびっくりぎょうてんで死んで Nat になってしまった。この娘のことをまた Ma The Kalei と呼ぶ人もいる。Maung Lat は妻と娘を失い心を痛め悲しみにくれて死に Nat になった。

父王の Nat は、人間の世界にいた頃、9つの町、9つの門、9つの杯、9振りの刀を持っていた皇太子の Ko Myo Shin が人々が災難に出遭ったりしないように守るように町、村の守護 Nat として、Pa Le Yin と Maung Lat, The The Lei こと Ma The Lei, Khwun Khyoe, Khwun Tha を Ko Myo Shin の従者としておくように命令を与えたので、Ko Myo Shin は、町や村を守る Nat として祀られるようになったといわれている。U Min Kyaw は、在命中、Pakhan Myo を治めていたので「Pakhan U Min Kyaw」と呼ばれる。

別説：

Shan Sawbwa の息子である Khwun Khyoe, Khwun Tha に Shan の貴い僧が Ka Ya Theiddi という薬をうっかり与え、2 人が邪悪になってしまったので、U Min Kyaw と大臣 Pinna Ba La が出掛けて行って捕えた。途中で Khwun 兄弟を大臣が殺そうとしたが、U Min Kyaw がそれを制して命を助け自国へ連れて行った。連れて行くと王が Ko Myo Shin と Pa Le Yin に養わせようとしたので恥辱に思い王座を奪った。

* 伝説の最初が違うが中の部分は同じで、Nat になって Khwun 兄弟を Ko Myo Shin

がその魂を抜いて2人がU Min Kyawを虎に遭遇させるところが違っている。細かい部分が違う伝説が3、4種類あるけれども、U Min Kyawが存命中、女色、酒、食べ物ととばくに興じ、馬に乗るのが秀でるのはどの伝説も一致している。

Nat になった人物：

- | | |
|------------------------|--------------------------------------|
| 1) Min Hla Sei Thu | Padaung 国王 |
| 2) Ku Ni Dei Wi | 同 王妃 |
| 3) Ko Myo Shin | 同 皇太子 |
| 4) Pa Le Yin | 同 王女 |
| 5) Khwun Khyoe | Ko Myo Shin, Pa Le Yin の養子, Shan の王子 |
| 6) Khwun Tha | 同 |
| 7) Maung Lat | Pa Le Yin の夫 |
| 9) U Min Kyaw | Pakhan 領主 |
| 10) U Nyo こと Ba Ba Nyo | その部下
(Bo Pyi) |
| 11) Shwe Kaing Medaw | U Min Kyaw の母 |

Ko Myo Shin の伝説に登場する Nat は37の Nat List には含まれていないが、Nat Hteim Nat Kadaw (shaman) が Nat 儀礼を行なう。家によっては Ko Myo Shin に因んで Shan のズボン、軟らかい菅笠、刀を供えている家もある。⁵⁾

3. KMS 精霊伝説の考察

(1) 「9」のシンボリズム

KMS は、「9つの町の主」という意味である。KMS の名前の由来については、伝説の最後の部分において「9の町、9の門、9の杯、9振りの刀」を司るというくだりに示されている。「9」という数字にまつわる象徴表現は、ビルマの宗教世界の他にも見られる。9づくしで構成されている *Paya Ko Zu* (Nine Lords) の儀礼がそれである。儀礼を行なう契機は家庭内に病人が出た時と HTIN AUNG は説明している⁶⁾。この儀礼の場には3組の「9」がミニチュアの像として招請される。1組は釈迦を中心としてそれに八大弟子が加わる。もう1組は惑星の神々で、その由来は Hindu を起源とする占星術とされる。ビルマの人々の命名は出生曜日に基づいてそれに割り当てられた字母を頭にするというルールが現在でも人々の間でよく知られている。それによれば、一週を水曜日を二分して八分し、それはまた方向観とも符合し、バゴダの八隅に対応している。各星は、象徴的な動物にまたがり、それに星中の王 Kate が加わり、やはり9体のミニチュアが儀礼の祭壇に置かれる。Kate 以外の像は大きなバゴダの8隅に見ることができる。

観察する機会を得た *Paya Ko Zu* 儀礼では、さらにもう1組、Nat の像が9体並べられていた。その配置では、祭壇の中央に釈迦を中心として各弟子がその周囲からその師を仰ぐよ

うに、またその向かって左側に Nat の像が、右側に星の神の像が、中央の釈迦の方を見るように置かれていた。そして祭壇の前には 9 杯の水が並べられていた。すなわちこの儀礼の場には、仏教、占星術、精霊世界の各代表が一堂に会しているのである。HTIN AUNG の記述には、さらに 3 種の花、3 種の果実、3 種のジャムの計 9 種の供え物がなされるとある⁷⁾。その記述には、精霊の像についての言及がなく、その配置法においても各星の神が各仏弟子の後ろに置かれるというように異なっているが⁸⁾、表面上の仏教の優越という点では一致している。彼は、ビルマ語の *Ko* には「9」の他に「守護を求める」という意味があるという⁹⁾。「信仰する」と通常訳される *Ko gwe* にも *Ko* が含まれている。ビルマの人々にとって「9」が特別の意味を帯びているのは確かなようだ。

「9」のタブーについてはすでに述べた。内容が同様なものに「Kyaukse を行くなら 9 人で行くな、石をひとつ加えて 10 にして行け」というのがある。やはり「9」が避けられている。土地と数字が結びつけられているというのは、その土地にその数字にまつわる伝承があるはずである。

Kyaukse はどのように「9」と結びついているのだろうか。Kyaukse は地理的にマンダレーの南に位置し、ビルマ族がその支配権を確立するに重要な舞台となった場所として知られ、G. H. LUCE は、パガン時代の刻文から「*MLACSA 11 KHARUIN*」「*CHAY TA RWA (Eleven Villages)*」とこの地域が呼ばれていたことを指摘している¹⁰⁾。*KHARUIN* は LUCE によれば、碑文では Kyaukse の 11 と、Minbu の 6 にしか用いられず、他の地域、たとえばビルマ族最初の王朝の都パガン周辺には用いられていないという¹¹⁾。そしてその語源について彼は、Nanchao Tai ではないかと考え、中心、核、木の髄、傘の柄の根元を表わす Shan 語、Tai 語に対応すると説明する¹²⁾。

Kyaukse は、Shan 州に源を発する 2 つの河川、Palaung, Zawgyi の水を利用して潤われた早くから灌漑設備が整えられた場所で、ビルマ族の米倉としてその経済的基盤となったというのが歴史家の評価である。古くからこの地はまた *Ko Khayaing* (9 のカヤイン) の名で知られていた。上記の *KHARUIN* と *Khayain* は正書法の違いであり同一語である。

その Kyaukse の灌漑化の歴史について SCOTT & HARDIMAN (ed.) *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*, 1900-1, (以下 GUB) に次のような伝承が報告されている。話はパガン朝最初の王 Anawrahta が、ビルマ暦 454 年 (西暦 1092 年) 中国から仏歯を得て王都へ帰ってくる時のことである。

『王が Thuwunna Poppada 山、現在は Pyet-kha-ywe として知られる山に滞留し、仏歯を安置する社を建立した。王はその願望実現に熱心であったが、社が完成した後、夢に 3 匹の蛇を見た。1 匹は 4 分し、別の 1 匹は 5 つに断ち切ったが、最後の 1 匹は傷を負わずことができず逃してしまった。彼は、この夢の意味をバラモンに問うた。バラモンは次のように夢判断をした—— 3 匹の蛇はこの地区の 3 つの川、すなわち Zawgyi, Palaung, Samon を意味する。4 つに断ち切られた蛇は、Palaung にあたり、その 4 つはその川より導かれる 4 つの水路を意味する。Zawgyi 川は二番目の蛇。5 つは 5 つの水路。三番目の蛇は Samon 川で、その川は川床が低く、治水に適さないと。それで Zawgyi 川は治水されな

いままとなった。』⁽¹³⁾

この伝承は、Kyaukse が「9つのカヤイン」と呼ばれるようになった由来が「9つの水路」にあることを語っている。⁽¹⁴⁾「蛇」のモチーフは水との関わりで興味深い。

また Kyaukse には、「9」のタブーの由来を説明する *Ko Thein Shin* (以下 KTS) の精霊伝説が記録されている。⁽¹⁵⁾GUB では、Anawrahta 王の治水起源のモチーフに続いて次の場面が展開する。⁽¹⁶⁾

『王が4つの堰と4つの灌漑水路を4つのカヤイン(現在の Myittha 地区)に完成させた時のこと、王は5つのカヤイン(現在の Kyaukse 地区)へ Nwa-dat の堰に適切な場所を見つける目的で視察に出かけた。途中王は Myo-hti の町を通過した。彼は大臣たちになぜ領主が表敬に前もって来ないのかと問うた。誰も答えられなかった。それで王は領主に参上するように命令を送った。しかし領主はほこり高く、抵抗できないと知ると、王の前に額くよりと、Zawgyi 川に身を投げた。王はこれを知り、川の堤に出かけ、その呪術的杖でその水を叩いた。死んだ領主は、生前臣下の礼をとることを拒絶したけれども、今度は水面に出るだけではなく、手を合わせて臣下の礼をとりながら上がってきた。「偉大なる王よ、あなたの力を前もって知っていたならばその命に背くことはなかったものを」王は答えた。「今やおまえは Nat となった。私はおまえをより偉大な Nat にすることさえできる。私はおまえを9つのカヤイン全部の守護霊に任じる。」そして今日に至るまで、ほこり高き Myo-hti の領主は、Thein Nat もしくは、Ko Thein Shin Nat の名であがめられている。』⁽¹⁷⁾

R. Grant BROWN の報告⁽¹⁸⁾には別の伝承がみえる。彼は、Kyaukse 地域で発見された木製の像を参照しながらその同定とそれにまつわる物語をつづっている。その木像の中に婦人の像があり、付近ではそれは Anawrahta 王の王妃の一人で Zawgyi 川を Shan 州へ数マイル行った丘陵に位置する Myogyi の Shan 王の妹といわれている。そして彼女は堰の人柱となったとする伝説とともに語られているのである。KTS については、九百万の町の領主を意味する KTS の称号を与えられた Myogyi の王が上記の伝承と同様に「臣下の礼をとることを拒否して Zawgyi 川に身を投げたほこり高き王」として登場する。そして不幸な兄妹の像と伝えられるものが、Kyaukse の丘の上の社に置かれているという。

NT はまた別の KTS についての伝説を紹介している。舞台は九つの領土を持つ Shan の Maw の国となっている。中国からの帰りの Anawrahta 王を迎えた領主はその娘と金の敷物を献上した。娘は王の寵愛を受けた。その後、王は彼女と離別し、Maw の国を攻めた。Sawbwa (諸侯) は命運がたつたことを悟り、皇太子 Saw Naung を Sawbwa とした。そして、新しい Sawbwa は父と同様に2人の姉妹 Saw Aung と Saw Nan を献上した。王はこうして Shan の恭順を受け、「9つのカヤイン」に到着すると、灌漑事業に着手した。

『...灌漑事業が王によって始まって三年がたったころ、労働者の間に熱病で死ぬものが多数出て、Zawgyi 川の工事の完成のめどがたたなかった。ほどなく決壊も出た。王の問いに

バラモン Hu Ya Nyo が答えた曰く、Aung（訳註：成功の意）の名が入った日曜日の娘を *zatei*（人柱）にすれば解決すると。王は王命により、9つのカヤインに住むそれに該当する娘を探させたが見つからなかった。

堰が完成すれば、土地が潤い、生産量も増加発展し、王国の利となるとして、自分の命を人柱として捧げようと王宮で成熟していた Saw Aung は *zatei* となった。

Saw Aung に続いて、Saw Nan も驚きのあまり狂乱して Zawgyi 川に身を投げて死んでしまった。

王の命によって召還された Sawbwa の前に、2人の娘が *asein nat*（怨霊）となった境遇と姿を表わすと、彼は失意のままに、Zawgyi 川に飛び込んで死んで *asein nat* となった。

Nat の3兄弟が王の前に姿を表わし、居住の場所として Nat の神殿を請うたところ、Maw の9つの国を支配する Sawbwa が9つのカヤインで9日に死んで Nat になったので、Ko Thein Shin として9つのカヤインに住む人々にあがめさせるよう封土した。

（中 略）

Ledwin Ko Khayain の精霊信仰の人々は深く傾倒して月の白分九日、黒分九日と9人での旅はするべからず、もしそうしたら災難に出会うと信じた。

Kyaukse は古くより Ledwin Ko Khayain（水田地帯の9つのカヤイン）とも堰の9つのカヤインとも呼ばれた。／Palaung 川系4つのカヤイン：Sawla Myo, Pinle Myo, Myittha Myo, Pynmana Myo,／Zawgyi 川系5つのカヤイン：Myaungghla Myo, Myingondain Myo, Panan Myo, Mekkaya Myo, Myinzain Myo

Ko Thein Shin は Sawbwa Nat であるので、Shan 州の国では、精霊信仰の人々も、町、村を守護する Ko Myo Shin として崇拝した。』⁽¹⁹⁾

Kyaukse のカヤインは11なのか、9つなのか。GUB には水路の数に由来とあり、LUCE は碑文から11のカヤインを比定している。NT に上げられている9つの町は、実は GUB に言及されているコンバウン朝時代の行政区分と一致している。⁽²⁰⁾また、そのうち6つは少なくとも表記法の違いとして碑文の11の半数と同一視できる。本論に主旨においては、史実的にいくつかということあまり意味をもたない。重要なことは、「9」という数字が Kyaukse 付近でいつからかわからないが、特別な意味を帯びていることである。また「9」がひとつのまとまった単位、あるいは、まとまりを代表する多数のセットの数字としてとらえられているということである。

我々は、KTS 起源伝説のいくつかのヴァリエーションを知った。各ヴァリエーションの共通した特徴を要素的にまとめると次のようになる。

- ① 支配者としての王（Anawrahta）
- ② 被支配を拒む領主
- ③ 王妃となるも堰完成に人柱となる領主の妹
- ④ 川（Zawgyi）に身を投げて Nat になる領主
- ⑤ 王により9つのカヤインの精霊世界からの守護者に任じられる（Ko Thein Shin）

伝説において一貫しているのは、支配者としてのビルマ族／被支配者としての Shan という構図である。GUB には Shan とは明示していないが、ビルマ族が覇権を握る際に屈服した人々という点で一致している。そこには、支配の正当化を強調する意図と、支配に至るまでの抗争の歴史を暗示されている。NT ではそのモチーフが二度表われる。そして屈服の背景では、恭順を拒む側が、領地の安堵のために娘を献上し、その娘が灌漑事業の成功のために犠牲となる。その娘も領主も非自然的な状況で水に入り死んで精霊となる。GUB では兄妹のペアは登場しない。だがこの被支配者側のペアは、ビルマの建築物における「人柱」の伝承という点から考えて特徴的である。

KTS の「9」の由来として GUB では「9つのカヤイン」であり、NT では Shan の国が 9つということからきていとされている。GUB の別個所²¹⁾に、Shan の国が Ko-Shan-Pyi つまり 9つの国とされてきたという Shan の年代記からの記述がある。史実的には、Kyaukse のカヤインの数と同様に、歴史家の研究を待たねばならない。だが、Shan には、他に Ko Maing, Ninety-nine Shan Sawbwas などの言い回しがあり、「9」が Shan において特別な意味を付与されていることは注目に値する。「9」が Shan 語で *Kao*²²⁾ というのも示唆的である。

バガン期頃の Kyaukse 周辺の民族分布について LUCE は、文化面における Mon 族の影響を指摘する。またその影響の度合は、Kyaukse が Minbu より濃いという。Minbu の灌漑の担当者は、Palaung と Sgaw Karen と比定する。またそれらの豊かな土地をねらう民族として Chin 族、Thet 族、Kadu 族の名前を碑文から解読している²³⁾。多くの民族の交流と抗争を我々は容易に想像することができよう。

そして、カヤインの語源と縁が深いと考えられる Shan 系。この Shan と現在 Shan 州に住む Shan 族を一線的に結びつけることができるかどうかは慎重になる必要があるが、系統的には同じグループと一般に考えられている。いずれにしても、KTS 精霊伝説の背景には、多民族同居のモチーフがあることは確かである。そういった精霊伝説に反映している多民族世界は、KMS 精霊の他の精霊との同居関係——並存性と関係があると考えすることはできないだろうか。

「9」が共通する KTS と KMS について考えてみる。NT には、KTS が Shan において KMS として崇拝されていると記述されている。ところがその出自に関してそうとは言いきれない点がある。それは、第 1 に、KMS が一般に Shan 起源とされていること。第 2 に、それにもかかわらず、KMS 伝説では、その偶像における Shan 風の服装が、わざとまもったとされていること。第 3 に、KTS には Shan 領主という位置づけがあることである。だが、伝説の背景として根本的に違う点は、KTS 伝説の方には、具体的な王朝の支配権の存在を正当化するメッセージを含んで、登場人物が、支配者／被支配者の関係であり、精霊世界の存在という構図におさまるのに対し、KMS 伝説の方には、そのような政治構造に反映するような構図がみられず、抗争は内乱的性格であり、しかも登場人物のほとんどが Nat になってしまうのである。従って KMS 伝説には、対外的な Shan との抗争はモチーフとしてあっても、それはあまり重要な要素とはいえないのである。

ではどう考えたらいいのだろうか。その場合注目すべきことは、KMS 伝説がさまざまな

要素を KTS に比べてより多く含んでいることである。たとえば、①地方には領主ではなく素封家がいること、②王位に就いたのは仮という策略、③精進を守り法に従った生活をするという誓い、④反することのできない誓いの水、⑤恨みをもって Nat になったのではなく魂を抜かれて Nat になるなどである。しかも上に述べたように、登場人物のほとんどが精霊になってしまう。換言すれば、物語性が高いのである。具体的な歴史と関連するような設定ではなく、昔の話ということになっている。その意味で、KMS と KTS は異質であるといえよう。そして伝説の物語性、政治色の欠乏は KMS 伝説の成立に深くかかわっているように思われる。その物語性に由来する娯楽性は後世の成立を類推させるのである。だが、場所不明、系統不明という単なる昔話ではなく、Shan 族系の精霊として認知されているということを見逃すことはできない。そして確かに「9」の共通以外にも共通点がある。それは、不幸な兄妹の2人の結末を表わすモチーフである。また KMS 伝説には不幸な2人の兄弟が登場する。これらの精霊となる兄弟の結末という点を次に考えてみよう。

(2) 不幸な兄妹と2人の息子のモチーフ

KMS の偶像は精霊となった兄妹のものである。その伝説において多くの登場人物が不幸な最後を遂げて精霊となっているが、その崇拜対象の中心はこの2人である。このペアの結末はその伝説成立においてどのような意味をもつのだろうか。KTS 伝説においても不幸な兄妹という組み合わせにかわりはない。Kyaukse 付近にはその史実的評価は別として人柱となった妹、そのあとを追って入水した兄の2人のものと民衆レベルで考えられている木像があることはすでに述べた。

ビルマには、不幸な兄妹を崇拜の対象とする代表的な精霊ペアがいる。それは、各家の守護神とされる Min Maha Giri とその妹である。その象徴はココナッツとされて多くは家の東南の柱付近に置かれ、それはまた精霊の住みかであり、精霊への供え物であるとも考えられている。ビルマでポピュラーな37柱の Nat のパンテオンでは仏教起源の Thagya Min に次いで、土着の精霊中では資料的にたどれる17世紀から19世紀のいずれのリスト・アップにおいても最高位を占める。その伝説は、ビルマの宗教世界についてふれる民族誌資料のいずれにも言及されている。伝説の舞台は、イラワジ川上流の Tagaung とそこからは下流にあたるバガン、そしてその精霊を祀ったとされるポーパ山である。

もうひとつ注目すべき KMS 伝説におけるモチーフは、不幸な兄妹のペアの育てられる2人の兄弟のそれである。ビルマにはまた Taungbyon 兄弟というやはりポピュラーな精霊のペアがいる。その祭礼は、ビルマ全土より多数の人々が参集するビルマ精霊世界最大のものであり、その崇拜の広がりや傾倒ぶりを感ぜさせるものである。伝説のシチュエーションは Anawrahta 王の覇権確立の過程であり、2人の兄弟は、王権により排除され Nat になったと伝承されている。

それぞれの伝説の概略を以下に示す。

Min Maha Giri Nat 伝説：

『Tagaung の鍛冶屋は、その力強さで有名だった。王はその強さを恐れ、捕まえようと

したが、彼は深い森に逃げ込んでしまう。それで王は、彼の妹を王妃とし、王妃を通じて兄に戻ってくるように伝えさせる。ところが戻ってきた王妃の兄を捕えてサガの木に縛りつけて火あぶりにしてしまふ。妹の王妃も火に飛びこんでしまふ。この兄妹は Nat になり木の影に近づくあらゆる動物を殺した。王は、命じてこのサガの木を引っこ抜かせ、イワラジ川に流す。それは下流のパガンに流れ着く。そしてこの兄妹は、パガンの王によってポーパ山に祀られることとなった²⁴⁾』

Taungbyon 兄弟伝説：

『Thaton の海岸にインド（もしくはアラブ）人の兄弟が流れ着く。彼らは、僧侶によって育てられる。ある時呪術師の死体を食べて超自然的力を獲得する。そのために王に追われ、兄は捕えられて処刑され、Thaton の町の守護神となる。弟の方はパガンの Anawrahta 王に仕え、Thaton 攻略に兄の精霊の助けもあって功績を上げる。その後弟は、ポーパ山から花を届ける役目を与えられる。彼はポーパ山に住む花を食べる鬼女と恋仲になり 2 人の息子を得る。そのために花を届ける時間に遅れ王に殺されてしまふ。母親の鬼女も悲しみで死んでしまふ。残された兄弟は王に仕え、仏歯を求めての中国への遠征に加わり手柄を立てる。その後、王が仏塔を建てる際に遊びに興じて割り当てられたレンガを提出する役目を怠る。そのために王によって処刑され Nat になる²⁵⁾。』

Min Maha Giri Nat 伝説が Kyaukse 付近でも同様に伝承されていることが、GUB にみえる²⁶⁾。

この 2 つの伝説の間にある、王権との対立者、最終的な王の勝利という図式の構造上の共通性についてはすでに指摘されている²⁷⁾。その図式はビルマにおける精霊信仰の体系を考える意味で重要であることは確かと思われる。本説ではそれをふまえた上でその図式の上に KMS 伝説をのせてみることにする。

(3) Min Maha Giri Nat 伝説、Taungbyon 兄弟伝説と KMS 伝説の比較考察

KMS 伝説をビルマの代表的ともいえる 2 つの精霊伝説の間においてみると、そのモチーフとしての構成要素の特徴が明らかになる。表にすると以下のようなになる。その際、ビルマの精霊信仰の基本構造をかんがみ KTS 伝説についても合わせて対比することにしたい。

まず Min Maha Giri (以下 MG) と KMS (KTS) との間の相関性についてその特徴を列挙してみる。

- ① MG と KMS に共通して、王 (Anawrahta/Min Kyaw Zwa) との王位をめぐる感情的摩擦がある。
- ② その出自はビルマ王側にとって「外」(Tagaung/Shan) に位置する。
- ③ 常ならぬ (近親相姦的/一生結婚しない誓い) 男女が重要な登場人物である。
- ④ 特別な力能 (力強い鍛冶屋/「9」の支配者) が伴なう。

* 灌漑設備導入との関わりが KTS には暗示的である。

精霊伝説の主要構成要素の比較表

	Maha Giri	Ko Myo Shin	Taungbyon
王との関係 (王の感情)	結婚／失敗 (妹) 不信, 嫉妬 (兄)	結婚の意図／失敗 (妹) 不信, 嫉妬 (兄)	主従／失敗
常ならぬ男女	兄妹／共に死んで Nat になる	兄妹／共に死んで Nat になる	鬼女との結婚 ／共に死んで Nat になる
死の理由	王によって	王によって	王によって
二人の息子	…………… 川に流され Pagan へ Nat として祀られる (Pyu 伝説では Naga の娘との間に 2 人の 息子あり, 王の反感 を買い殺され Nat と して祀られる) (もう 1 人の妹と娘 も Nat になった)	養子の 2 人／殺される Nat として祀られる (妹の娘も Nat として祀 られる)	2 人の息子 ／殺される Nat として祀られる
その出自	鍛冶屋	Shan	Indian (Arab)
死の理由	……………	王によって	王によって

- ⑤ その妹が, 王にとっては王妃もしくは結婚の対象となる。
- ⑥ その関係は最終的には彼女の死という形で破局を迎える。
- ⑦ 兄も王との抗争関係で死んでしまう。
- ⑧ その死に方が, MG では「火」であり, KTS では「水」である。
- ⑨ 兄妹が共に死んで Nat になる。
- ⑩ 常ならぬ男女の組み合わせである兄妹の間には性関係はない。(ココナッツが祀られる部屋では性行為は慎むべきとされ, MG には近親相姦的に性行為を避けることが暗示的であり, KMS では一生結婚しない誓いが 2 人之間にある一方で, 養親として 2 人の息子を育てる。)

次に Taungbyon (以下 TB) と KMS (KTS) の対比を要素ナンバーを共通させながら試みる。

- ① TB と KMS に共通して, 王と感情的摩擦がある。
- ② その出自はビルマ王側にとって「外」(India or Arab/Shan) である。
- ③ 常ならぬ(鬼女と超自然的力をもつ男／一生結婚しない誓い)の男女が重要な登場人物である。

- ④ 特別な力能を伴なう。
- ⑥ その関係は最終的には彼女の死という形で破局を迎える。
- ⑦ 男は王との抗争関係で死んでしまう。
- ⑧ 男女は死んで Nat になる。
- ⑩ 常ならぬ男女が 2 人の息子を得る。
- ⑪ 2 人の息子は一旦王側に立つが、結局王に殺されてしまう。
- ⑫ 2 人の息子は Nat になる。

TB は、2 人の息子というペアは 2 度登場するというモチーフがあるものの、その構成要素の対比は興味深い結果を提供する。それは、KMS 伝説が不幸な兄妹とその 2 人の息子という 2 つのモチーフを併せもつということについてである。KTS を考えてみた場合には、王位との対立者／王権の最終的勝利というビルマ王側でその伝説が編まれるならいわば当然ともいえる基本構造で共通している。MG と TB との間を貫く精霊信仰伝説の基本構造以外に、その 2 つの伝説の間に KMS 伝説を置いた場合、MG と KMS の間に「2 人の不幸な兄妹」を媒介にして、TB と KMS との間には「2 人の息子」を媒介にして KMS 伝説の成立の背景を想起させるのである。

MG 伝説の成立と TB 伝説の時代的前後性をこれだけの資料をもとに論じるのはいささか無理があるかもしれない。だが、それぞれのシチュエーションを比べた場合、MG が王権を直接的に脅かす存在として登場するのに対し、TB は同じく王権を脅かすといっても主従関係が前面に出ている。この点に注目するかぎり、現在まで伝わっている説話の構成からみればかぎり TB の後的成立を考えることができるかもしれない。というのは、その多くの要素を含む物語性から KMS 伝説の後世での成立の蓋然性についてすでに指摘したが、その伝説の構成をみればかぎり、不幸な男女を親とする 2 人の兄弟が伝説中で演じる役割はあまり重要とはいえない。いわば後からの付加的可能性が強いように思われる。勿論、MG と KMS が同じ Kyaukse でその精霊としての名を流布されていることは上述したが、TB と KMS の間の関連性について残念ながら資料はない。だが、「2 人の息子が共に精霊になる」というモチーフは局所的なものではなく、一般的にビルマの伝説成立の過程において注目すべき重要なプロットであり、その影響関係は否定できないのではないだろうか。また KMS 伝説別説の Shan の貴い僧の不思議な薬を 2 人の兄弟が服用したというのは Taungbyon 兄弟との関連を考える意味で重要なモチーフといえる。

その「不幸な常ならぬ男女のペアと 2 人の息子が精霊になる」伝説におけるプロットの広汎性のひとつの根拠は、いままで考察してきた伝説以外にもそのプロットがみられるということである。その一例は、政治構造における位置づけから、その性格が対極にある支配者としての王権の正当性を意図的に表現する欽定年代記 *The Glass Palace Chronicle* (以下 GPC) の Tagaung 建国説話²⁸⁾である。年代記の歴史から考えて GPC 成立に至るまで、さまざま要素が加わったことは確かであるが、この説話には問題となるモチーフが表われる。本節で問題としていることに関係する部分だけ抽出すると以下ようになる。

- ① 牝鹿が皇太子の尿を飲んで身籠る。そして娘が生まれる。
- ② 王妃が懐妊して2人の盲目の息子が生まれる。
- ③ 2人の息子は川に流されるが、鬼女に出会い視力を回復する。
- ④ 息子の一人と娘が出会い王と王妃となる。
- ⑤ もう1人の息子も後に王位に就く。

①のモチーフはビルマ以外の地域の説話にもみられることからわかるように、年代記全体の成立の考察にはさまざまな多くの説話との対比を経なければならないが、少なくとも考察を加えている「常ならぬ男女」と「2人の息子」のモチーフが含まれている。しかもそれらは最終的には王と王妃として政治構造の上に立つのであり、自然死ではなく死んでNatになるという点で精霊伝説と対照的である。その意味から単に王権の対立者／王権という構図を越えて、王朝年代記は精霊伝説の裏返しといえるかもしれない。もうひとつの例はMGの別の伝承²⁹⁾で、一般に知られている上記の伝説の別のヴァージョンである。その舞台は、Ta-gaungではなくYetaungになっているが、基本的構成は変わらない。そしてその伝承の起源は、ビルマ族の覇権成立より前の先住民族とされるPyuの時代に求められている。それによれば、鍛冶屋には係累がいることになっている。その1人は、王妃となるが、兄に続いて火の中に飛びこんだ妹であるが、その他にもうひとりの姉妹、そして妻がいることになっている。彼女は、Nagaの娘とされ、夫である鍛冶屋との間に2人の息子が生まれる。この2人は、最終的には王位を脅かす者として王の計略によって死に至り、Natになる。この2人の精霊はその両親と同様に、19世紀王命で編まれた37柱のNatのリストにも含まれているやはりポピュラーな精霊である³⁰⁾。ここにも「常ならぬ男女のペア（力強い鍛冶屋とNagaの娘）とその2人の息子が精霊となる」というプロットがみえる。従ってこのプロットを単独成立というよりは、伝承の過程において、何らかの影響があったものとして、その系譜関係をたどる可能性のあるものとしてとらえるのではないだろうか。KMS伝説にみられるプロットについて、いくつかの説話との対比から今日伝えられる形のものになるまでの過程の一端を、確かにここに求めることができるように思われるのである。

4. 結 論

本論の目的とするところは、ビルマにおける精霊群の並存性から、精霊信仰の認識レベルにせまることであり、その作業を通してビルマの精霊信仰の全体の把握に寄与することであった。そのために、ビルマにおいて最もポピュラーな37柱のNatのバンテオンに含まれないKMSをその研究対象とした。

まず第1に、KMS伝説の長い引用とそのモチーフとプロットの他の精霊伝説との比較において得られたことをKMS伝説の特徴としてまとめれば以下のようなようになるだろう。

- ① KMSは不幸な死を背景とし、*asein* Nat（怨霊）の資格を有す。
- ② 特定の地域を精霊世界から守護し、その地域にかかわる人々にタブーを課す。

これらの点は37柱の Nat にも共通する、いわば Nat イメージの基本構造といえるだろう。

- ③ 「9」のシンボリズムがそのアイデンティファイの重要なポイントである。
- ④ 登場人物のほとんどが異常な死を遂げ Nat になる。
- ⑤ 歴史上の王家との関係が不明である。

後の2点で、KMS は37柱の Nat と明確にその性格が異なる。ただし、「9」のシンボリズムを通して同系と考えられている KTS にはそのプロットは明瞭である。

- ⑥ KMS 伝説には、Nat 起源というプロットの他に、多くのモチーフが含まれている。

このことから、KMS 伝説の物語性の高さとその後世における成立の蓋然性を認めることができるだろう。

第2に KMS 伝説の具体的な中味のモチーフを考えてみた場合、それぞれ37柱の Nat の中で最も知名度と人気のある家の守護神 Min Maha Giri と Taungbyon 兄弟の起源伝説に共通する「不幸な兄妹」「2人の息子」のモチーフが含まれていることが認められる。KMS 伝説と同系と考えられている KTS 伝説の Nat となる重要な登場人物の係累関係も「兄妹」である。この点は、Kyaukse という伝説に縁の深い空間を考慮した場合、その相互の交流と影響による変容の可能性を否定できないだろうと思う。一方、KMS 伝説には、「2人の息子」のモチーフも認められる。そのペアで最も知られる Taungbyon 兄弟と KMS には直接的交流の痕跡の資料はないが、「不幸な男女のペアから生まれた2人の息子がやはり不幸な死を遂げ Nat になる」というモチーフの重層は、Min Maha Giri の別のヴァージョン、さらにその暗示的モチーフをビルマの建国説話にも見出すことができ、そのモチーフの広汎性を十分推測することができるように思われる。このようにして KMS 伝説を2つのポピュラーな精霊伝説の間に置いた場合、以上のことが指摘できると同時に、その成立の経緯の一端を類推できよう。つまり、「不幸な兄妹」「2人の息子」のモチーフを基盤に、Shan との関係を想起させる「9」のシンボリズムを加えて成立したのではないかと。これが本論の考察を通しての KMS 伝説をめぐる問題についての現時点での結論である。

もうひとつ最後に付け加えたいのが、KMS 伝説において「内」と「外」の対立が明確でないことに関してである。37柱の Nat の場合は「内」なる最終的に勝利をおさめる王権と「外」なるその対立者という構図が貫かれている。KTS 伝説も同様である。だが、KMS 伝説の場合、Shan との抗争という舞台設定はあるものの、「内」「外」の対立はない。王権の篡奪者が登場するが、彼も結局は不幸な最後を迎え Nat になってしまう。「異常な死を遂げる *asein*」という点で共通するものの、Nat を支配する最終的な勝利者がいないのである。このことは、KMS 伝説成立のもうひとつの背景、Shan とビルマという民族的抗争が落ち着いた時期という時間的比定を示唆する。つまりその成立が、Shan がビルマ文化の枠の中に取り込まれた後のことと考えられるのである。このことは本論の冒頭から問題としている KMS の他の精霊との並存性と無関係ではないように思われる。精霊伝説、精霊のグルーピングの

背景に、枠内への取り込みという方向づけがあり、それが精霊群の並存性につながっていくのではないだろうか。KMSが37柱のNatというパンテオン化した精霊群に含まれていなかったらこそ、その特異性はより明確になるように思われるのである。そしてその枠内への取り込みという背景が、ビルマの精霊信仰全体の成立に深くかかわっていると考えられるのである。

5. 今後の課題

今後の課題とすべき第1の点は、本論における資料不足を補うことである。KMS伝説についてもローカル・レヴェルの伝説、特に上ビルマにおける伝承の収集が必要不可欠であろう。また、ビルマの精霊信仰の全体へと論説を展開したいなら、下ビルマのローカルなNat, U Shin Gyiについても考察を深めることが重要であろうと思う。

第2に、各論として本論の中で残した問題の分析をさらに試みなければならない。まず「9」のシンボリズム。言及した事象以外にその資料はないか、そしてそれは確かにShanと結びつけていいものかどうか。次に、ビルマ精霊伝説においてその広汎性が認められる2つのモチーフの再考。精霊のグルーピングを考えるならば、さらに他の係累関係のペアはないか、それが精霊群のパンテオン化とどのように結びついているか、その精霊世界への反映の元となるべき現実の人間世界の親族関係との関係はどうだろうかなどである。また、Min Maha GiriとKTSの死に方の対照、「火」と「水」も気になるところである。さらにまた、Min Maha GiriとKMSの異常な死に方にSagaの木が関係していることも伝説の細かいモチーフの背景を分析する意味で忘れることができないだろう。

第3に民族性の問題を考えなければならない。KMSについて特徴的なことは、その出自がShanとされていることである。では、伝説上のShanと現在主にShan州に居住するShan族とはそのまま結びつくのだろうか。その具体的な系統については歴史家の成果を待つしかないが、それは、エスニシティ (ethnicity) の問題ともつながっていくのではないだろうか。エスニシティという考え方は、研究者による定義づけ³¹⁾からもわかる通り、具体的な民族の移動と接触の経緯がたどれる場合に適応できるいわば現代的な多民族世界を考える場合の概念といえるだろう。実は、本論の問題提起の発端は、エスニシティの概念を過去の民族抗争と交流の経緯にも摘要できないかということであった。当然のことながら、過去と現在のShanのエスニシティを同列に扱うことには無理がある。だが、Shanがビルマ文化の中に取り込まれていく過程を、たとえば本論のような精霊伝説の変遷をたどることである程度まで類推することができるとするならば、少なくともその概略の一端にせまることはできるのではないだろうか。エスニシティの変化もひとつのテーマとなりうるのではないかということを経後の課題の最後として付け加えたい。

付 記

本論は、鹿児島大学南方海域研究センター第42回研究会（昭和60年6月17日）で発表した「多民族世界の位相——ビルマ近況報告」と国立民族学博物館共同研究『東南アジア、オセ

アニアにおける文化クラスター・文化項目の相関性の研究（代表大林太良教授）』の研究会（昭和60年10月29日）で発表した「Ko Myo Shin 信仰をめぐって——『民族』のビルマ的座標研究ノート」の一部を加筆訂正したものである。この場を借りて発表の機会を与えてくださった関係の諸先生方といただいたご助言に対し謝意を表したい。

注

- (1) SPIRO 1967 : 100.
- (2) Central Census Committee 1983
1973年センサスの民族調査項目については従来公表されていなかったが、1983年センサスの予備報告に Shan 族などの一部についてのみ人口比率が1973年センサスからの参照データとして記載されている。具体的な数字ではないので誤差が予想される。
- (3) 池田 1979.
- (4) NT 1981 : 109.
- (5) *ibid.* : 130-134.
- (6) HTIN AUNG 1962 : 7.
- (7) *ibid.* : 14-15.
- (8) *ibid.* : 13.
- (9) *ibid.* : 21.
- (10) LUCE 1959 : 82.
- (11) *ibid.* 85.
- (12) *ibid.* : 98.
- (13) GUB 2-1 : 504.
- (14) GUB も参照している HARVEY (HARVEY 1967 : 25) は Zaw gyi 川は、三分され、3つの水路となり、最後の1匹の蛇は北の Myitnge 川を表わすという伝承を記述している。参照記載からみるかぎり、本論では参照できなかった *Ko Kyayaing Thamaing* (『9つのタマイン史』) からの引用と思われる。
- (15) 大野 1975 : 65他。
Kyaukse には、Min Byu Shin (White Horse Lord) が精霊世界における守護者とする報告が多い。
- (16) GPC では96ページ。
- (17) GUB 2-1 : 517.
- (18) BROWN 1916 : 491-2, 494, BROWN 1921 : 87.
TAW SEIN KO がこの2つの像をその形状から Anawrahta 王と領主と比定しているとの参考意見が併記されている。
- (19) NT : 135-140.
- (20) GUB 2-1 : 511. 「9つのカヤイン」という呼称が、それほど古くはないという予想はつくかもしれない。

- (21) GUB 1-1 : 188-189.
 (22) *ibid.* : 626.
 (23) LUCE 1959 : 86-87, 91-92.
 (24) GPC では45-46ページ。他 TEMPLE 1906, HTIN AUNG 1962などにも記述されている。
 (25) GPC では75-84ページ。
 (26) GUB 2-1 : 517-518.
 (27) 田村 1985 : 202-203.
 (28) GPC では1-20ページ。
 (29) TEMPLE 1906 : 45-47, HTIN AUNG 1962 : 84-89.
 (30) HTIN AUNG 1962 : 107-109. その像は6本の手, 合掌, 武器携帯が特徴である。
 (31) 綾部 1984 : 422, 中村 1984 : 15-16.

引用文献

- 綾部恒雄 1984. 東南アジアの国家と民族——国家の領域的類型とエスニシティの形態. 民族学研究, 48-4 : 418-432.
- BROWN, R. Grant. 1916. The Lady of the Weir. *Journal of the Royal Asiatic Society*, 791-796.
1921. The Pre-Buddhist Religion of Burmese. *Folklore*, 32 : 77-100.
- Central Census Committee (Ministry of Home and Religious Affairs) 1983. 1983 Population Census (Advance Release).
- HARVEY, G. E. 1967. *History of Burma: From the Earliest Times to 10 March 1824 The Beginning of the English Conquest.* (1st ed. 1925) Frank Cass & Co. Ltd., London.
- HTIN AUNG, Maung 1962. *Folk Elements in Burmese Buddhism.* Oxford Univ. Pr.
- HTUN HAN, U and BA NYUNT, U (td. and ed.) 1981. *Myanma Miyoephala Dalei Nat Thamain* (in Burmese) (orig. TEMPLE 1906), U Aung Kwun Sapei, Rangoon.
- 池田正隆 1979. 下ビルマにおける伝承と信仰——ウー・シンジー・ナッ. 季刊人類学, 10-1 : 101-146.
- LUCE, G. H. 1959. Old Kyaukse and the Coming of the Burmans. *Journal of the Burma Research Society*. 42-1 : 75-109.
- 中村孚美 1984. 都市人類学の展望. 「現代の人類学——都市人類学」(中村孚美 編), 7-26. 至文堂, 東京.
- 大野 徹 1975. 上座部仏教とナット信仰. 「ビルマ——その社会と価値観」(大野, 桐生 稔, 斎藤照子共著), 11-91, 現代アジア出版会, 東京.

- SCOTT, J. George and HARDIMAN, J. P. (ed.) 1900-1. Gazetteer of Upper Burma and the Shan States, 1-1, 2-1, Burma Govt., Rangoon.
- SPIRO, Melford E. 1967. Burmese Supernaturalism. Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall.
- 田村克己 1985. ビルマの精霊信仰と民間伝承. 「日本民族文化の源流の比較研究シンポジウムⅣ 民間伝承」国立民族学博物館 大阪.
- TEMPLE, R. C. 1906. The Thirty-Seven Nats: A Phase of Spirit-Worship Prevailing in Burma. W. Griggs Chromo Lithographer London.
- TIN, Pe Maung and LUCE, G. H. (td.) 1923. The Glass Palace Chronicle of the Kings of Burma. Oxford Univ. Pr.

(1986年3月30日受付)

参考文献